

令和6年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第4号（7月）

令和6年6月26日
山形県病害虫防除所

[概要]

普通作物：葉いもちの発生量は平年並の予想です。本田の見回りを徹底し、早期発見に努め、発病が見られた際は直ちに茎葉散布剤を散布してください。

斑点米カメムシ類の発生量はやや多い予想です。雑草での増殖抑制のため、畦畔・農道等の継続的な除草と水田内の残存雑草対策を徹底してください。

園芸作物：りんごの斑点落葉病、日本なしの黒星病、果樹共通害虫の果樹カメムシ類の発生量は**やや多い予想です**。耕種的対策を徹底するとともに、散布間隔があきすぎないように注意し、防除を徹底してください。

秋冬ねぎのシロイチモジヨトウはやが多く、野菜・花き共通のオオタバコガは多い予想です。早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底してください。

次の発表は7月31日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
いね	葉いもち	—	平年並
	紋枯病	—	やや多い
	斑点米カメムシ類	—	やや多い
	コバネイナゴ	—	少ない
りんご 西洋なし 日本なし かき 果樹共通害虫	斑点落葉病	—	やや多い
	黒星病	—	平年並
	褐斑病	—	平年並
	せん孔細菌病	—	平年並
	輪紋病	—	やや多い*
	黒星病	—	やや多い
	チャノキイロアザミウマ	—	平年並
	果樹カメムシ類(り・も・な・か)	—	やや多い
	モモシンクイガ(り・も・な)	—	平年並
	ナシヒメシンクイ(り・も・な)	—	平年並
ナミハダニ(り・も・な・お)	—	平年並	
夏秋きゅうり すいか メロン 秋冬ねぎ 野菜・花き 共通害虫	べと病	—	平年並
	斑点細菌病	—	平年並
	炭そ病	—	平年並
	つる枯病	—	平年並
	斑点細菌病	—	平年並
	つる枯病	—	平年並
	シロイチモジヨトウ	—	やや多い
	アブラムシ類(夏・す・メ・き)	—	やや多い
	ハダニ類(夏・す・メ・え・き)	—	平年並
	オオタバコガ(夏・す・メ・ね・え・き)	—	多

* 感染量

()内 り：りんご、も：もも、な：なし(西洋なし、日本なし)、お：おうとう、か：かき、夏：夏秋きゅうり、す：すいか、メ：メロン、ね：秋冬ねぎ、え：えだまめ、き：きく

下記の病害虫は、防除上注意すべき事項等について記載しています。

作物名	病害虫名
いね	稲こうじ病・墨黒穂病、フタオビコヤガ、セジロウンカ・コブノメイガ
いだり	ジャガイモヒゲナガアブラムシ
りんご	輪紋病・炭そ病
ぶどう	灰色かび病・晩腐病
もも	灰星病
日本なし	輪紋病
おうとう	褐色せん孔病
かき	円星落葉病
すいか	褐色腐敗病・疫病
秋冬ねぎ	さび病、ネギアザミウマ、ネギハモグリバエ
かき	アザミウマ類

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	https://agrin.jp/theme/byogai_chubojosho/index.html	
農作物有害動植物発生予察情報	https://agrin.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html	

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和6年6月1日～8月31日

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに記載されている①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等をよく読んで、記載事項を正しく守って使用しましょう。
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用するとともに、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：○食品安全衛生課(023-630-2160)
○農業技術環境課(023-630-3419)
○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)
○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課

農薬情報は：○やまがたアグリネット <https://agrin.jp/>

毒物・劇物の相談は：○最寄りの各保健所
・山形市保健所(023-616-7261)
・村山保健所(023-627-1248) ・最上保健所(0233-29-1257)
・置賜保健所(0238-22-3872) ・庄内保健所(0235-66-5478)
○健康福祉企画課(023-630-2332)

公園等病害虫等管理 マニュアルの相談は：○水大気環境課(023-630-2339)

1. 合成ピレスロイド剤等を使用する場合は、市町村農作物有害動植物防除協議会等で定めた地区に限って使用し、蚕・魚類に対する被害を防止する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるミツバチへの危害を防止する。
4. 農薬の使用後は防除日誌の記帳に努める。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (-)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉いもち	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在、本田での発生は確認されていない（平年：6月23日）。
- イ. 6月20日の生育調査では、いねの葉色は平年並である。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多く、日照時間は少ないと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 本田の見回りを徹底し、早期発見に努め、発病が見られた際は直ちに茎葉散布剤を散布する。特に、7月中旬以降は予防粒剤（育苗箱施用薬剤及び水面施用薬剤）の効果が低下し始めるとともに、気象条件（平均気温が20～25℃、曇りや降雨が続く）により葉いもちが広域で確認される時期を迎えるため、注意深く観察する。
- イ. 窒素質肥料の多施用は発病を助長する恐れがあるため、適正な肥培管理に努める。
- ウ. QoI 剤（ストロビルリン系薬剤）耐性菌が全県で確認されているため、薬剤の選定に留意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 紋枯病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 6月20日の生育調査では、いねの茎数はやや多い。（+）
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 例年発生が見られる圃場では、圃場をよく観察し、発生が確認される場合は下表の防除要否の目安を参考に穂孕後期または出穂期の防除を行う。
- イ. 薬剤は株元によく付着するようていねいに散布する。

表 防除要否の目安		品種：はえぬき
判定時期	防除の判断基準	
穂孕後期	発病株率 10%以上で防除	
出穂期	発病株率 15%以上で防除	

※ 1 筆当たり 5 条おきに 20 株の計 100 株を水田中央部まで調査

(3) 稲こうじ病・墨黒穂病

穂孕期から出穂期頃の降雨により感染が多くなるため、前年発生が見られた圃場や、例年発生の見られる圃場では下記の対策を実施する。

ア. 出穂 20～10 日前までに薬剤防除を行う。

イ. 銅剤を使用する場合は、出穂期近く及び葉が濡れている時に散布すると薬害の恐れがあるので注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ ・アカヒゲホソミドリカスミカメ ・オトゲシホソカメムシ)	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 6 月後半の巡回調査の結果、畦畔・農道等におけるすくい取り調査では、発生確認地点率は平年並、平均すくい取り虫数はやや多い。

イ. 水田内すくい取り調査では、発生確認地点率は平年並、平均すくい取り虫数はやや多い。

ウ. 6 月 4 半旬までの予察灯の誘殺数は、アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメいずれもやや多い。(＋)

エ. 向こう 1 か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 畦畔、農道、休耕田等で雑草が繁茂しているところでは、速やかに除草を行う。

イ. 出穂 2 週間前頃（7 月中旬頃）までに畦畔、農道、休耕田等の除草を徹底し、生息場所での密度低減を図る。 なお、刈り取った草は放置せずに搬出する。

ウ. 水田内にイヌホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが多い圃場では、斑点米カメムシ類の水田内での発生が多くなるので残存雑草対策を徹底する。

エ. 休耕田等の雑草が繁茂しているところでは、耕耘による除草も効果が高い。

オ. アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメは移動性が高いことから、地域ぐるみで一斉に除草を行い、地域全体の密度低減を図る。

カ. 出穂期前後の草刈りは、斑点米カメムシ類の水田侵入を促し、斑点米の発生を助長するので原則行わない。やむを得ず草刈りを行う場合は、水田の薬剤防除計画に合わせて実施する。

キ. 穂揃期及び穂揃期 7～10 日後の 2 回の基本防除を徹底する。2 回目の基本防除後に水田内のすくい取り調査を行い、斑点米カメムシ類が確認された場合は、2 回目の基本防除から 7～10 日後に補完防除を行う。

ク. 例年、8 月下旬以降の斑点米カメムシ類の発生が多く被害が見られる圃場で、防除回数を 2 回とする場合は、出穂期 10 日後頃及びその 7～10 日後に防除時期を変更してもよい。なお、薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、防除を実施する。

(5) フタオビコヤガ (イネアオムシ)

6月後半の巡回調査の結果、発生量は少ないが、圃場をよく観察し、発生が多い場合には被害初期(葉先がカスリ状になった時)に薬剤を散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(6) コバネイナゴ	少ない

1) 予報の根拠

6月後半の巡回調査の結果、発生量は少ない。(一)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 7月上旬の水田内における20回すくい取り虫数が100頭以上の場合は防除を行う。なお、乳剤を散布する場合は畦畔等も含めて散布する。

イ. 薬剤防除を行う場合は、乳剤では散布前に、粒剤では散布2、3日後に畦畔の草刈りを実施すると効果が高まる。

(7) セジロウンカ・コブノメイガ

6月24日現在、飛来は確認されていないが、今後、低気圧や前線の通過に伴って大量に飛来することがあるので、発生動向に注意する。

2. だいず

(1) ジャガイモヒゲナガアブラムシ

寄生密度が急激に高まることがあるので、圃場を十分に観察し、今後の発生動向に注意する。

II 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(十)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。

イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 黒星病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月後半の巡回調査の結果、発病葉及び発病果の発生量はやや少ない。(－)
- イ. 向こう1か月の降水量は、平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 発病葉及び発病果は、二次感染の伝染源となり、その胞子の飛散時期は収穫まで長期間に渡るため、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。また、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。
- イ. 7月下旬までは重点防除時期となるので、薬剤散布予定日に降雨が予想される場合は、計画を前倒して降雨前に散布し、散布間隔を10日間以上あけないようにする。なお、降雨が続く場合には、雨の合間を見て散布を行う。
- ウ. 薬剤散布に当たっては、十分な薬液量(5000ℓ以上/10a)で、果実にも十分量付着するようていねいに散布する。また、スピードスプレーヤにより防除する場合は、散布速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 褐斑病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. 6月24日現在、発生は確認されていない(平年初確認日:7月12日)。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 例年発生が見られる園では、発生初期の防除を徹底する。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。
- ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、散布ムラが生じないようにていねいに薬剤散布を行う。

(4) 輪紋病・炭そ病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

炭そ病は前年の発生量が多く、樹上の越冬菌密度が高いと予想されるため、散布ムラが生じないようにていねいに薬剤散布を行う。また、発病果は二次伝染源となるので見つけ次第摘み取り適切に処分する。

2. ぶどう

(1) 灰色かび病・晩腐病

圃場をよく見回り、発病果は二次伝染防止のため見つけ次第摘み取り適切に処分する。薬剤防除を行う場合は、果房が汚れないように注意する。

3. も も

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) せん孔細菌病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月後半の巡回調査の結果、発病葉及び発病果の発生量はやや少ない。(一)
- イ. 6月10日の特別巡回調査の結果、全調査地点(8地点)で発病葉が確認され、発病果の発生も3地点(発生地点率:37.5%)で確認された。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(十)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をこまめに見回り、発病枝は見つけ次第せん除し適切に処分する。なお、一度せん除した枝でも再び病斑が発生する可能性があることから、病斑部だけでなく可能な限り健全部を含めて基部からせん除する。
- イ. 発病葉や発病果も二次伝染源になるので、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
- ウ. 例年発生が見られる園や風当たりの強い園では、防風ネットを設置する。
- エ. 発生が見られる園では、7月上旬まで約10日間隔で薬剤防除を行う。また、降雨が続く場合には、散布間隔があきすぎないように注意する。なお、品種ごとの収穫開始時期を考慮し、各薬剤の収穫前使用日数を厳守する。

(2) 灰星病

6月後半の巡回調査で果実腐れの発生は確認されなかったが、早生・中生種では、7月中旬から重要な防除時期に当たるので防除を徹底する。薬剤防除を行う場合は、収穫開始時期を考慮し農薬使用基準を遵守する。また、園内の見回りを徹底し、発病果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

4. 西洋なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	感 染 量
(1) 輪紋病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 柄胞子の初飛散確認日は6月5日(平年:6月9日)でやや早く、降雨によって柄胞子の飛散が確認されている。
- イ. 向こう1か月の降水量は、平年並か多いと予報されている。(十)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 梅雨明けまでは重要な防除時期に当たるので、薬液が枝幹部にも付着するよう十分量散布する。
- イ. 降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。
- ウ. 果実への感染を防止するため、キャプタン・有機銅剤を使用する防除体系では、散布間隔を10日以上あけないようにし、本剤散布後からの積算降水量が100mmに達する前に次の薬剤散布を行う。

5. 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	やや多い

1) 予報の根拠

ア. 6月後半の巡回調査の結果、発生量はやや多い。(＋)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 伝染源密度低減のため、園内の見回りを徹底し、発病部位（果実、葉）は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

ウ. 不要な徒長枝はせん除し、散布ムラが生じないようにいねいに薬剤散布を行う。

(2) 輪紋病

降雨が続くと感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

6. おうとう

(1) 褐色せん孔病

前年秋季の発生量は多く、越冬伝染源密度が高いと推察される。降雨により感染が多くなるので、雨よけ除去後速やかに収穫後防除剤を散布するとともに、散布間隔があきすぎないように注意する。

7. か き

(1) 円星落葉病

前年被害落葉からの孢子飛散は、7月中旬頃まで続くので、例年発生が見られる園では、散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) チャキイロアザミウマ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月後半の巡回調査では、被害果は確認されていない(平年初確認:8月上旬)。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

7月下旬までの防除を徹底する。なお、幼果とへたの隙間にも薬液が十分付着するよういねいに散布する。

8. 果樹共通害虫

病虫害名	対象作物名	予報内容
		発生量
(1) 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ・チャバネオカメムシ)	りんご・もも・なし ・かき	やや多い

<5月23日付け発生速報第1号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 6月4半旬までの集合フェロモントラップにおけるチャバネオカメムシの総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）では8頭（平成：4.8頭）、鶴岡市では129頭（平成：33.9頭）といずれも多かった。（+）
- イ. 6月3半旬までの予察灯におけるクサギカメムシの総誘殺数は、県予察圃場は2頭（平成：0.9頭）とやや多かったが、農業総合研究センター（山形市）は未誘殺（平成：0.3頭）で、水田農業研究所（鶴岡市）は未誘殺（平成：0.2頭）であった。
- ウ. 一部りんご園では果樹カメムシ類による被害果が確認されている。
- エ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平成並か多いと予報されている（+）

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 気温や湿度の高い日に果樹カメムシ類の飛来が多くなる傾向が見られる。今後、越冬後成虫に加えて新成虫も発生して密度が高まるため、園内を十分に見回り、樹上の寄生や被害果の発生に注意する。
- イ. 成幼虫の寄生や卵塊、被害果が見られる場合は、速やかに薬剤散布を行う。
- ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病虫害防除基準」を参照し、カメムシ類に効果のある剤で防除を実施する。

病虫害名	対象作物名	予報内容
		発生量
(2) モモシンクイガ	りんご・もも・なし	平成並

1) 予報の根拠

- ア. 県予察圃場（寒河江市）のフェロモントラップにおける初誘殺は、6月24日現在確認されていない（平成：6月3半旬）。
- イ. 前年の発生量は平成並であった。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平成並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 7月は重要な防除時期になるため、薬剤の選定に留意し、散布間隔があきすぎないように防除を行う。特に前年に果実被害が見られた樹では、周辺で羽化した雌成虫による果実への産卵が集中しやすいため、防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内を見回り、心折れや被害果は、見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 被害が見られる園では、薬剤の選定に留意し、防除を徹底する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(4) ナミハダニ	りんご・もも ・なし・おうとう	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. ナミハダニは高温・乾燥条件で急増する場合がありますので、園内をこまめに観察し、ハダニ類の成幼虫数が1葉当り3頭以上見られたら殺ダニ剤を散布する。
- イ. ナミハダニの下草における増殖を抑制するため、園内の除草を励行する。なお、除草後に下草から移動したナミハダニにより樹上密度が高まることがあるので、除草後に殺ダニ剤を散布する場合は下草が枯れるまで待つて行う。
- ウ. 樹冠内部の散布ムラを生じないように不要な徒長枝はせん除し、薬液到達性を高め、十分量の薬液をていねいに散布する。
- エ. おうとうでは収穫終了後に速やかに被覆資材を除去し、殺ダニ剤を散布する。

9. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) ベと病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月上旬）。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。
(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。
- ウ. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 斑点細菌病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。
(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。
- ウ. 無機銅を含む剤は薬害の恐れがあるので散布するときは薬害軽減のため必ずクレフノンを加用するとともに、高温時、収穫間際の散布は避ける。
- エ. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し適切に処分する。

10. すいか

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 炭そ病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月上旬）。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。
(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 通風を良くし、過繁茂にならないよう栽培管理に注意する。
- イ. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。
- ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) つる枯病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月24日現在、発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 通風を良くし、過繁茂にならないよう栽培管理に注意する。

イ. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。

ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

(3) 褐色腐敗病・疫病

降雨が続いたり、圃場内に雨水が滞水した場合に突発的に発生することがあるので以下の対策を実施する。

ア. 排水不良地では明きよを設置する等、排水対策を徹底する。また、すいかマットを設置し果実への感染を防止する。

イ. 降雨により圃場が滞水した場合には、速やかに排水を行い、薬剤散布を行う。

ウ. 発病果は直ちに除去し、適切に処分する。

11. メロン

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点細菌病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 薬剤散布は、発生前からの予防防除を基本とし、薬液が葉裏や果実に十分付着するようていねいに行う。

イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) つる枯病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。
(+)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 薬剤散布は、発生前からの予防防除を基本とし、薬液が株元や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
- イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。

12. 秋冬ねぎ

(1) さび病

内陸地域、庄内地域ともに確認されていない（平年初確認 内陸：7月上旬、庄内：6月下旬）。降雨が続くと発生が多くなるので、圃場をよく観察し、発生初期から防除を行う。

(2) ネギアザミウマ

6月24日現在の発生量はやや多い。高温乾燥の気象条件下では生息密度が急激に高まるため、圃場をよく観察し、生息密度が高くなる前に防除を行う。なお、薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性個体の出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループを用いて輪用散布を行う。

(3) ネギハモグリバエ

6月24日現在の発生量はやや少ない。気温の上昇に伴って生息密度が高まるため、圃場をよく観察し早期発見に努め、発生初期から防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) シロイチモジヨトウ	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. フェロモントラップにおける初誘殺は、県予察圃場（寒河江市）では4月5半旬（2か年平均：5月5半旬）、地区予察圃場（酒田市）では4月5半旬（平年：5月6半旬）と早く、初誘殺以降も継続的に誘殺されている。（+）
- イ. 県予察圃場（寒河江市）及び農業総合研究センター（山形市）では、圃場で幼虫及び被害が確認されている（内陸巡回調査圃場3か年平均初確認：8月上旬）。（+）
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。
- イ. 卵塊や、ふ化直後の幼虫の集団が見られる葉は、取り除き適切に処分する。
- ウ. 幼虫の齢期が進むにつれ防除効果が低下するため、卵塊確認時や被害初期（葉の先端部が透けた時）に薬剤防除を行う。なお、薬剤防除を行う場合は、薬液が株全体に十分かかるようていねいに散布する。
- エ. 前線や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

13. きく

(1) アザミウマ類

- 6月24日現在の発生量は平年並であるが、気温の上昇に伴って密度が高まるため、圃場をよく観察するとともに以下の対策を実施する。
- ア. 圃場とその周辺の雑草にも寄生するので、除草を徹底する。
 - イ. アザミウマ類はウイルス（TSWV）を媒介するため防除を徹底する。
 - ウ. 薬剤散布は、薬液が茎頂部や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。
 - エ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループで輪用散布する。

14. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり・すいか ・メロン・きく	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 6月24日現在の発生量はやや多い。（+）
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 圃場周辺の除草に努め、圃場内への有翅虫の飛来を防止する。
- イ. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬液が茎頂部や葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり ・すいか・メロン ・えだまめ・きく	平年並

1) 予報の根拠

ア. 6月24日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

イ. 薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一薬剤の連用を避ける。

ウ. 気門封鎖剤は殺卵効果がないため、1週間間隔で2～3回散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) オオタバコガ	夏秋きゅうり・すいか ・メロン・秋冬ねぎ ・えだまめ・きく	多い

<5月24日付け 発生速報第3号発表>

<6月6日付け 注意報第1号発表>

1) 予報の根拠

ア. 6月4半旬までのフェロモントラップにおける総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）、地区予察圃場（酒田市）ともに多い。（+）

イ. 夏秋きゅうり、すいか、メロン、きくにおいて花や果実で幼虫及び被害が確認されている。（+）

ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。

イ. 幼虫の寄生や被害が見られる場合は、直ちに薬剤散布を行う。なお、薬液が株全体に十分付着するようていねいに散布する。

ウ. 被害部位（果実、花蕾、新芽等）は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。

エ. 前線や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

オ. 薬剤抵抗性の出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。また、薬剤防除後にも被害の拡大が見られる場合には、異なるグループの薬剤を散布する。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →			← 平 年 並 →			← やや少ない →		←少ない→

東北地方 1か月予報（06/22～07/21）		
2024年06月20日14時30分 仙台管区気象台 発表		
特に注意を要する事項	期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。	
向こう1か月 06/22～07/21	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率70%です。
	降水量	降水量は、東北日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 06/22～06/28	気温	1週目は、高い確率70%です。
2週目 06/29～07/05	気温	2週目は、高い確率70%です。
3～4週目 07/06～07/19	気温	3～4週目は、高い確率50%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）			
気温	東北地方	向こう1か月 06/22～07/21	
		1週目 06/22～06/28	
		2週目 06/29～07/05	
		3～4週目 07/06～07/19	
降水量	東北日本海側	向こう1か月 06/22～07/21	
	東北太平洋側	向こう1か月 06/22～07/21	
日照時間	東北地方	向こう1か月 06/22～07/21	

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)